

神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市
「子どもたちのネット利用に係る実態調査結果」
報告書

平成 26 年 10 月 10 日

本資料は、平成 26 年度に実施した神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市の共同による「子どもたちのネット利用に係る実態調査」に基づく報告書となります。

=====
目次
=====

1. 調査趣旨	P1
2. 調査概要	P1
3. 調査結果概要	P2
4. 調査結果詳細	P3
5. 調査結果の補足	P16
6. 効果的な取組についてのまとめ	P17

(参考)

- ① 神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市
「子どもたちのインターネット利用に係る実態調査」の集計結果
- ② 子どものインターネット利用に関するアンケート用紙

1. 調査趣旨

近年、全国的にスマートフォンやソーシャルメディア利用が急速に普及したことにより、新しいサービスやコミュニケーション形態が拡大し、これに伴う長時間利用が懸念されている。

こうした中、四縣市（神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市）は、平成 25 年 10 月に行われた四首長懇談会での提案の結果、ネット依存に係る小中高校生の実態把握やネット依存から子どもを守る効果的な取組について、意見交換を行い、共同で研究や検討を行うこととなった。

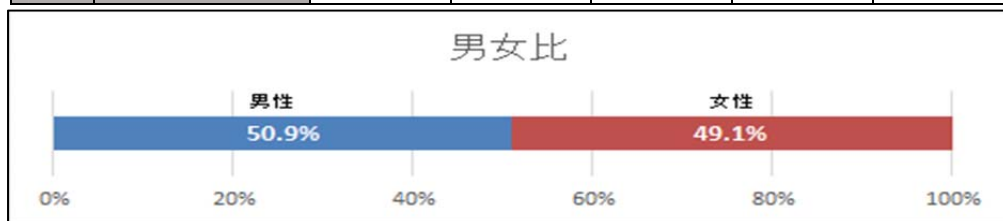
その取組の一つとして、県内の小・中・高等学校の児童生徒のインターネット利用の実態を把握し、今後のネット依存から子どもを守るための効果的な取組の参考とするため、標記調査を実施した。

2. 調査概要

- ・調査対象 神奈川県内の小中高等学校で実施
三政令市：小学校（5、6 学年）から各学年 20 学級抽出
 中学校（1～3 学年）から各学年 20 学級抽出
神奈川県：高等学校（1～3 年）から各学年 28 学級抽出
- ・調査項目 利用機器、利用方法、利用時間、困ったときの相談先、生活習慣等 11 項目
- ・調査方法 各学校を通じて、児童生徒へ調査票を配付することにより実施
- ・実施期間 平成 26 年 6 月～7 月
- ・分析考察 ネットスター株式会社（宮崎 豊久氏）
- ・回答者数 13,251 人

【対象者詳細】

		全体	神奈川県	横浜市	川崎市	相模原市
回答者数		13,251	2,765	3,788	3,468	3,230
学校別	小学生	3,980	0	1,481	1,331	1,168
	中学生	6,506	0	2,307	2,137	2,062
	高校生	2,765	2,765	0	0	0



3. 調査結果概要

今回実施した調査結果は、大きく次の7つにまとめられる。

- ① ほとんどの子どもたちが、インターネットに接続可能な端末を所持しており、スマートフォンの所持率では全体で52.5%、高校生にいたっては90.2%であった。
- ② 利用方法で一番多いのは、家族や友達との連絡で78.7%であった。また、学習の調べものに44.2%が利用していた。
- ③ 一日の利用時間は、1時間以上2時間未満のグループと、5時間以上のグループが多かった。
- ④ 利用のルールを決めていないグループに長時間利用の傾向が見られた。
- ⑤ 長時間利用の子どもに、朝食を食べない、睡眠時間が短い割合が多くみられた。
- ⑥ 5.9%の子どもが困ったときに相談する相手がいない、または相談する勇気がないと答え、2.0%がインターネット上で相談するとしていた。
- ⑦ 93.7%の子どもがなんらかのネットの危険性を知っており、危険性に対するフィルタリングの有効性も68.0%が理解していたが、利用率は58.8%であった。

また、調査結果から見えてきたポイントとして、次の4項目があげられる。

- ① 利用内容と長時間利用との関連性
- ② 生活習慣と長時間利用との関連性
- ③ 利用のルール設定と利用時間との関連性
- ④ ネット利用の危険性やフィルタリングの必要性の認識とフィルタリング利用率との
かい離

これらを分析した結果、インターネットの適切な利用を促すためには、IT (ICT) リテラシー教育や医療分野の対策だけでなく、長時間のネット利用の原因を、生活習慣、コミュニケーション、子どもの居場所づくりの観点から捉え直し、予防的な取組を考えていく必要があることが見えてきた。今後のネット依存の予防に向けた効果的な取組としては、次の5点が必要な項目としてあげられる。

- ① 長時間利用と依存傾向との分析
- ② 親子の良好なコミュニケーションづくりと生活習慣改善の啓発
- ③ 利用のルールづくりとその啓発
- ④ インターネットだけを居場所としない、子どもが相談しやすい環境づくりの考察
- ⑤ 保護者と子どもへの継続的なIT (ICT) リテラシーの啓発

4. 調査結果詳細

4-1 情報端末の所持状況

所持端末のうち、ゲーム機が最も多く約6割となっていた。スマートフォンの所持率は5割を超え、高校生においては約9割がスマートフォンを所持している結果となった。

一方で、全くインターネットを利用していないと答えた児童生徒は全体の3.4%で、ほとんどの子どもたちが何らかの機器でインターネットに繋がる環境であった。

※「あなたはどのような情報通信機器を使っていますか」の問に対して（複数回答）（n=13,159）

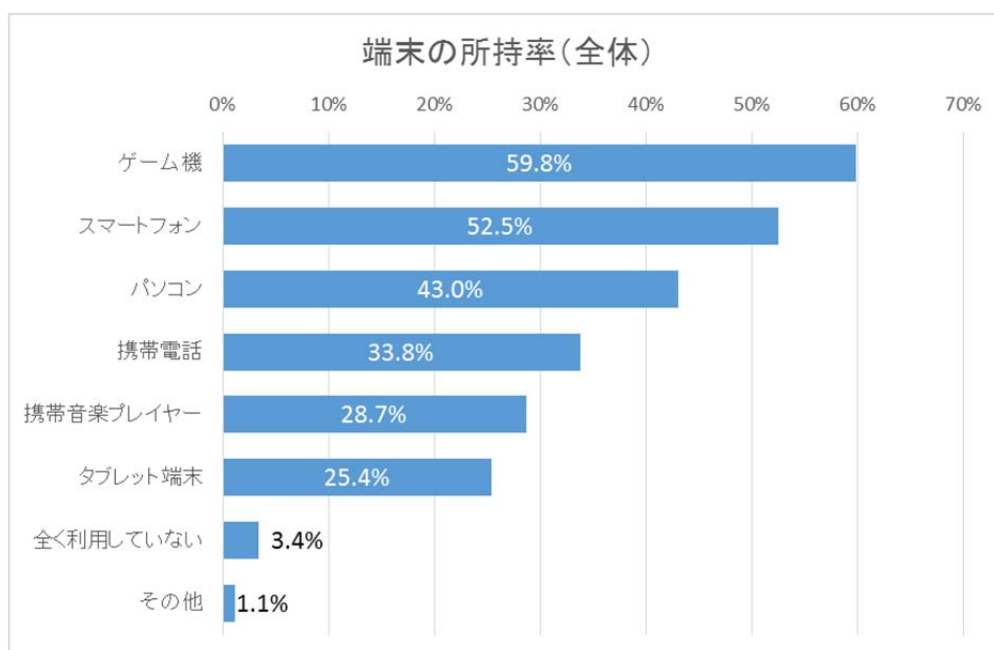


図 4-1-1 情報端末の種類別所持率（全体）

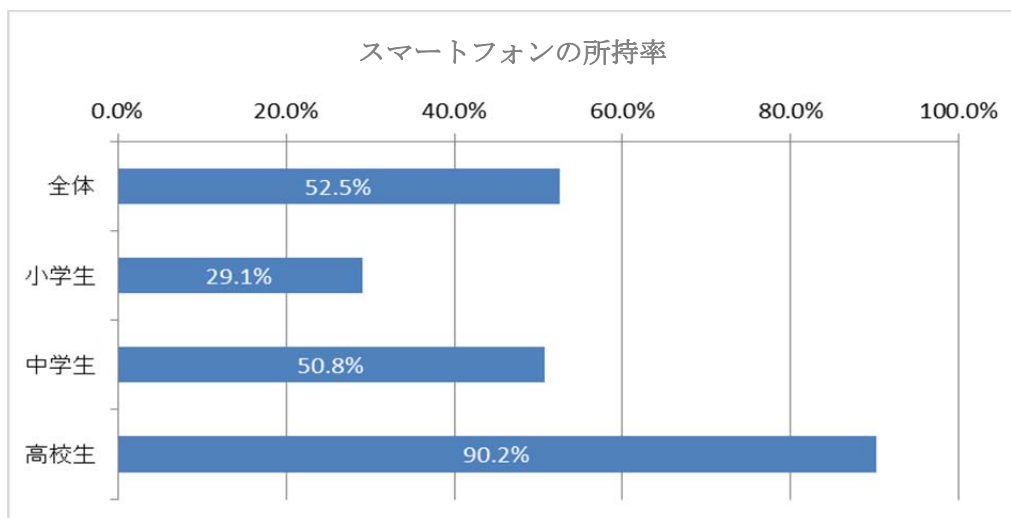


図 4-1-2 スマートフォンの所持率

4-2 情報端末の利用方法

スマートフォンを始めとする情報端末機器の利用方法で最も多かったのが、家族や友達との連絡であった。

さらにゲーム、趣味の調べもの、動画・音楽鑑賞、友達とおしゃべりなど娯楽的な使い方が続いた。

その一方で、学習の調べもの、試験勉強の共有や塾などの教育機関との連絡など、学習関連も全体の約5割で利用されていることが確認された。

男女での差は、おしゃべりなどのコミュニケーション系や写真の編集などは女子の割合が多く、ゲームは男子が多い結果となった。

※「情報通信機器をどのように利用していますか」の問に対して（複数回答）（n=12,627）

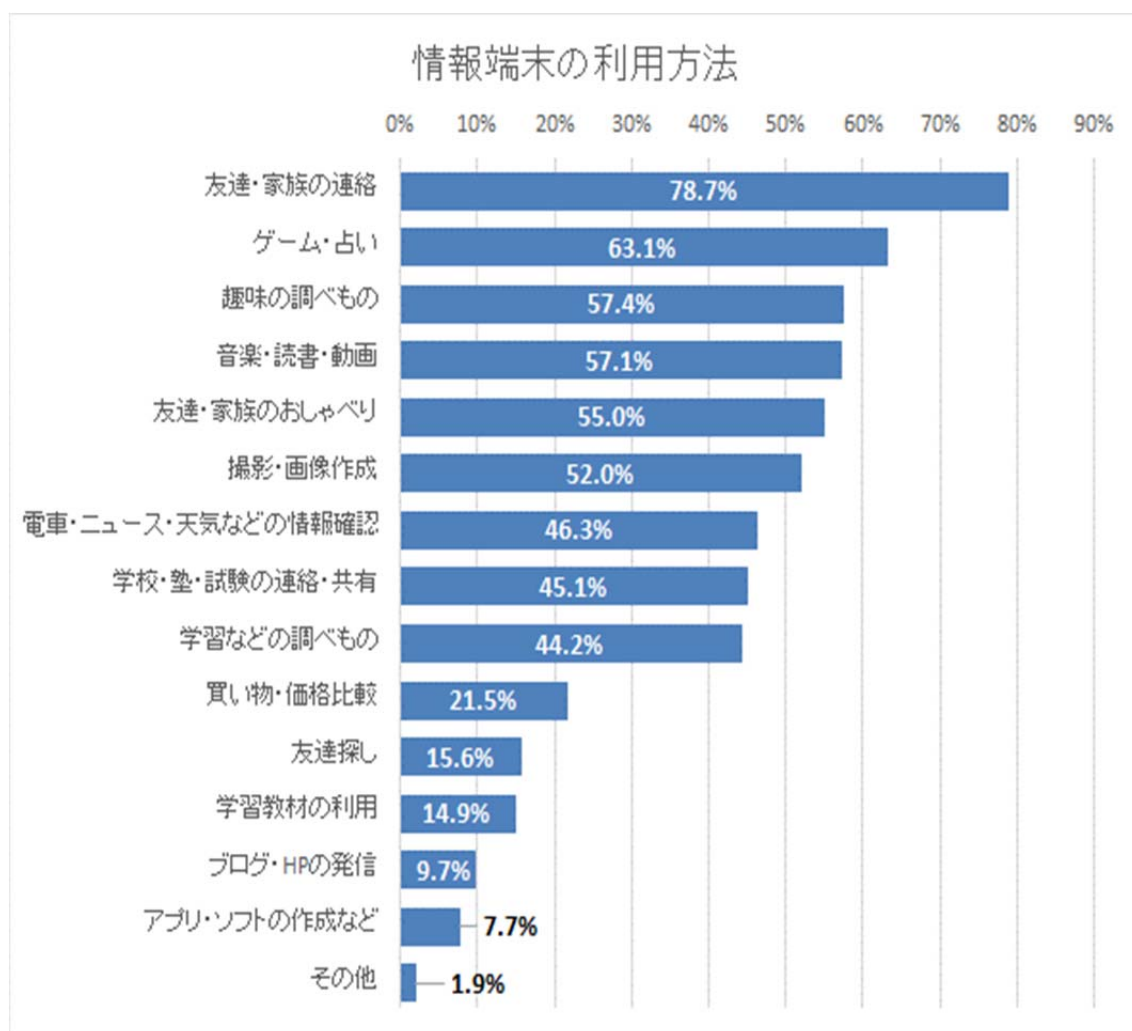


図 4-2-1 情報端末の利用方法

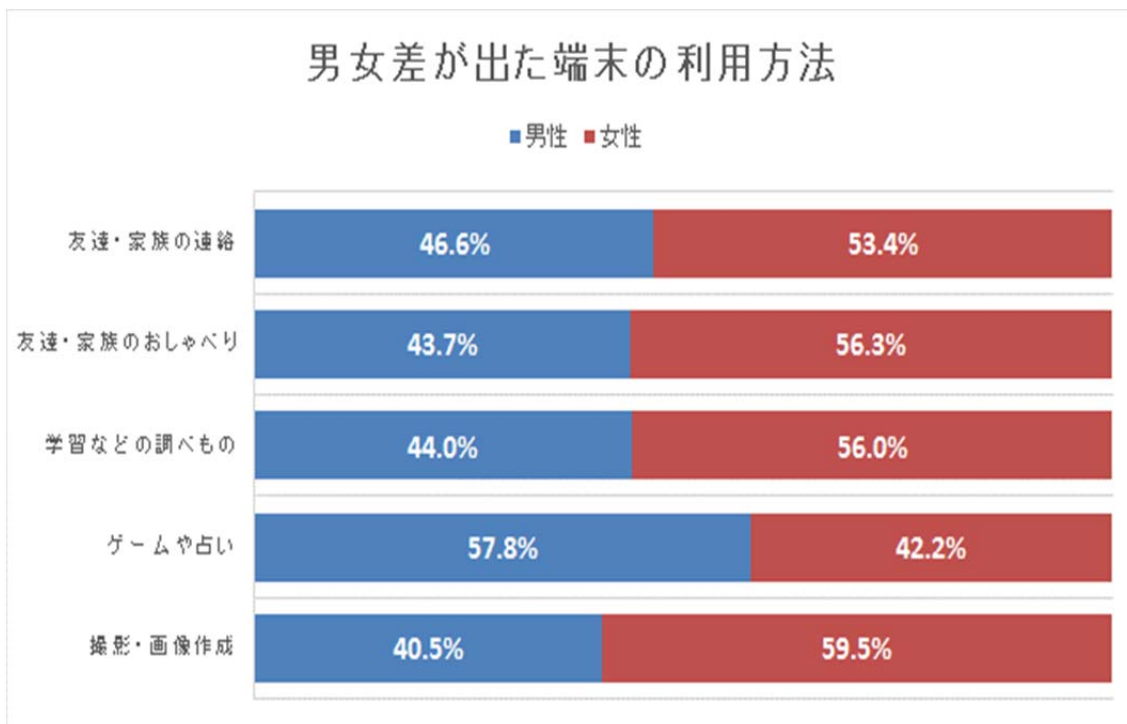


図 4-2-2 男女差が出た端末の利用方法

※500人以上差がついたものを抜粋

4-3 情報端末の利用時間

1日の利用時間で多かったグループは1時間以上2時間未満と5時間以上ではほぼ同数であった。3時間未満の利用者は全体の約6割に及んだ。

利用内容上位5位の傾向をみると、30分未満のグループと5時間以上のグループでは順位は多少異なるものの同じ内容となったが、長時間利用の上位に来る利用方法は娯楽的な要素が多かった。

※「利用方法を多い順に3つ並べ、それぞれどのくらい使いますか」（利用方法は5ページ参照）

※「1から3以外も含めた1日の合計利用時間」の間に対して（n=10,208）

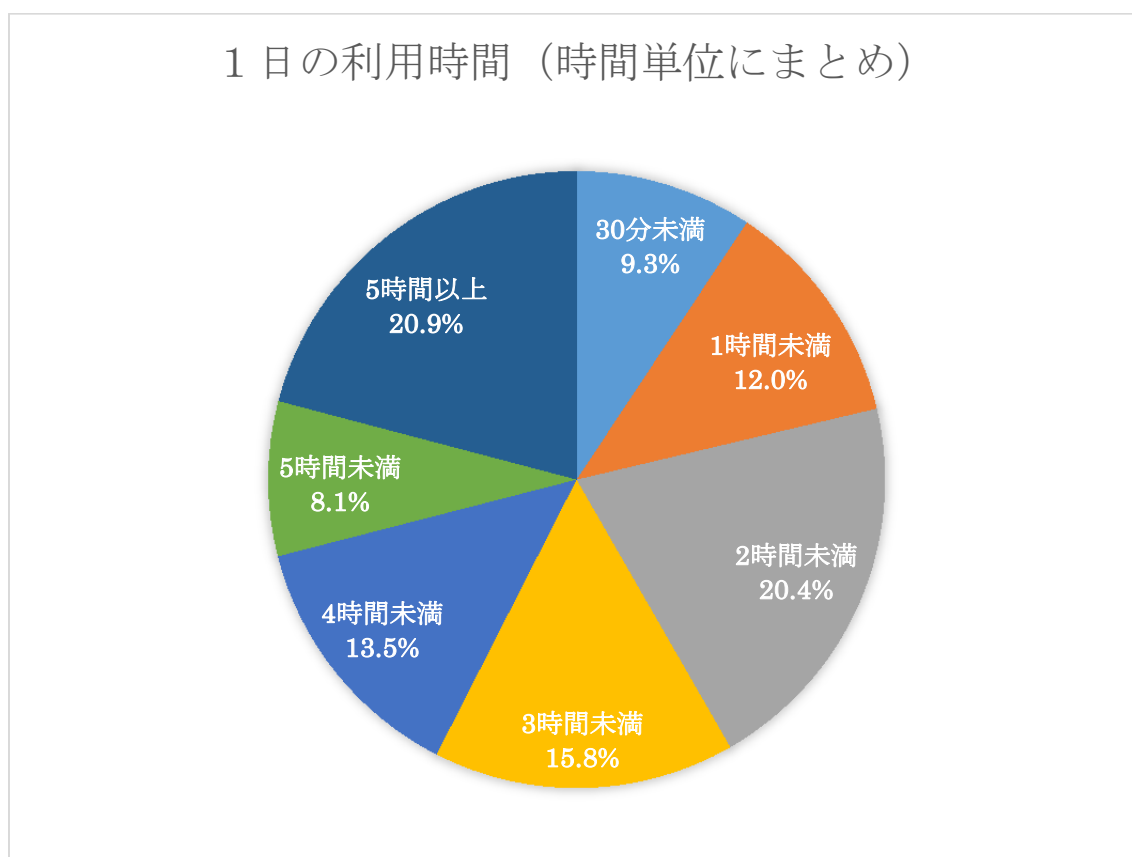


図 4-3-1 1日の利用時間

1日に端末を30分未満使う者の利用内容（上位5位）

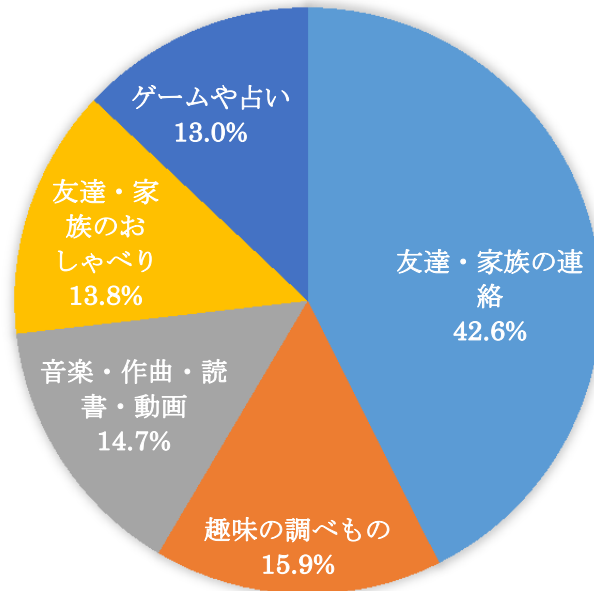


図 4-3-2 1日に端末を30分未満使う者の利用内容

1日に端末を5時間以上使う者の利用内容（上位5位）

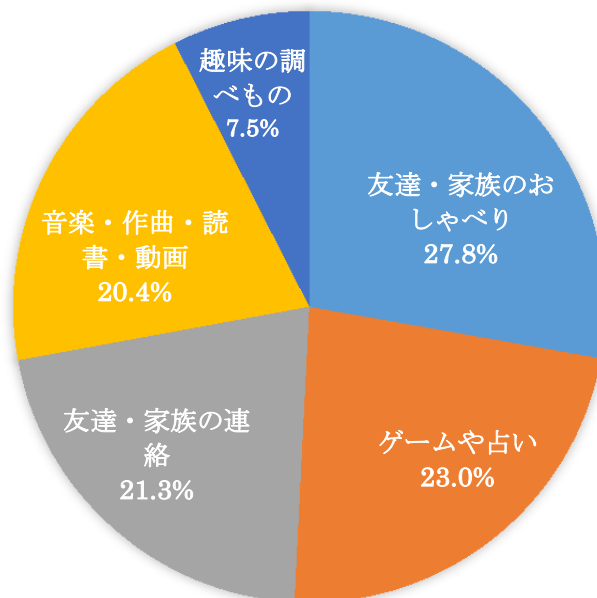


図 4-3-3 1日に端末を5時間以上使う者の利用内容

4-4 利用ルールと利用時間の関係性

全体の半数以上が保護者や友達と利用に関してルールを決めている結果となった。友達同士でルールを決めているグループは中学生に多く見られたが、全体としては少ない傾向であった。

またルールを作っているグループより、作っていないグループの方が長時間利用する傾向が見られ、特に5時間以上使うグループは顕著にその傾向が現れた。

※「情報通信機器の利用についてルールを決めているか」の問に対して(n=12,261)

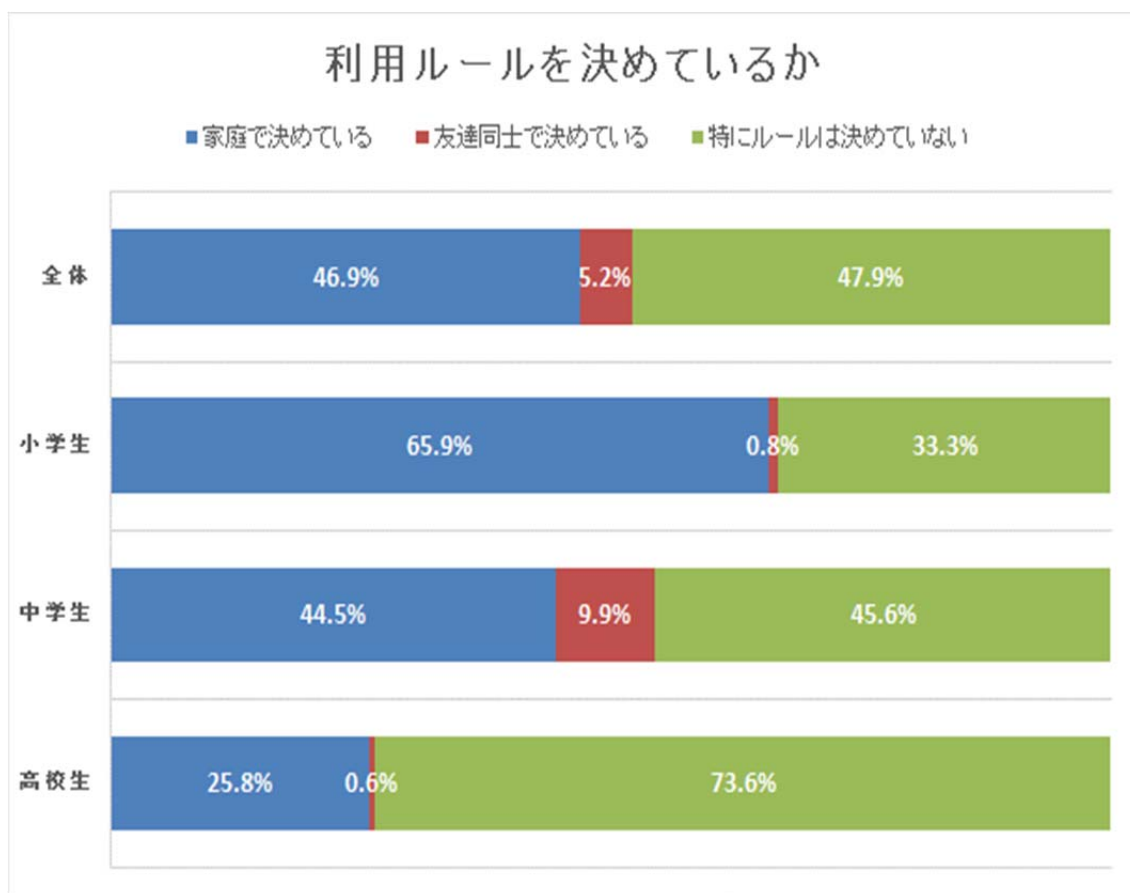


図 4-4-1 利用ルールの取り決め状況

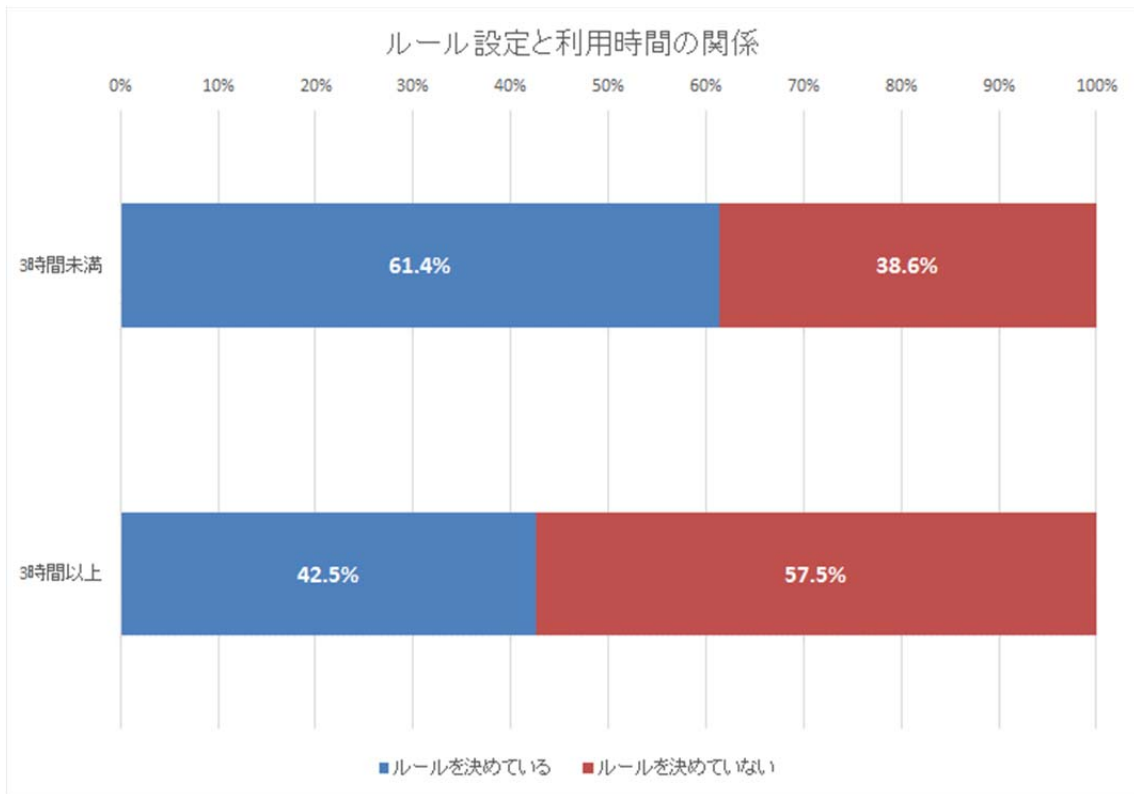


図 4-4-2 利用ルール設定と利用時間の関係（利用時間 3 時間を境にした場合）

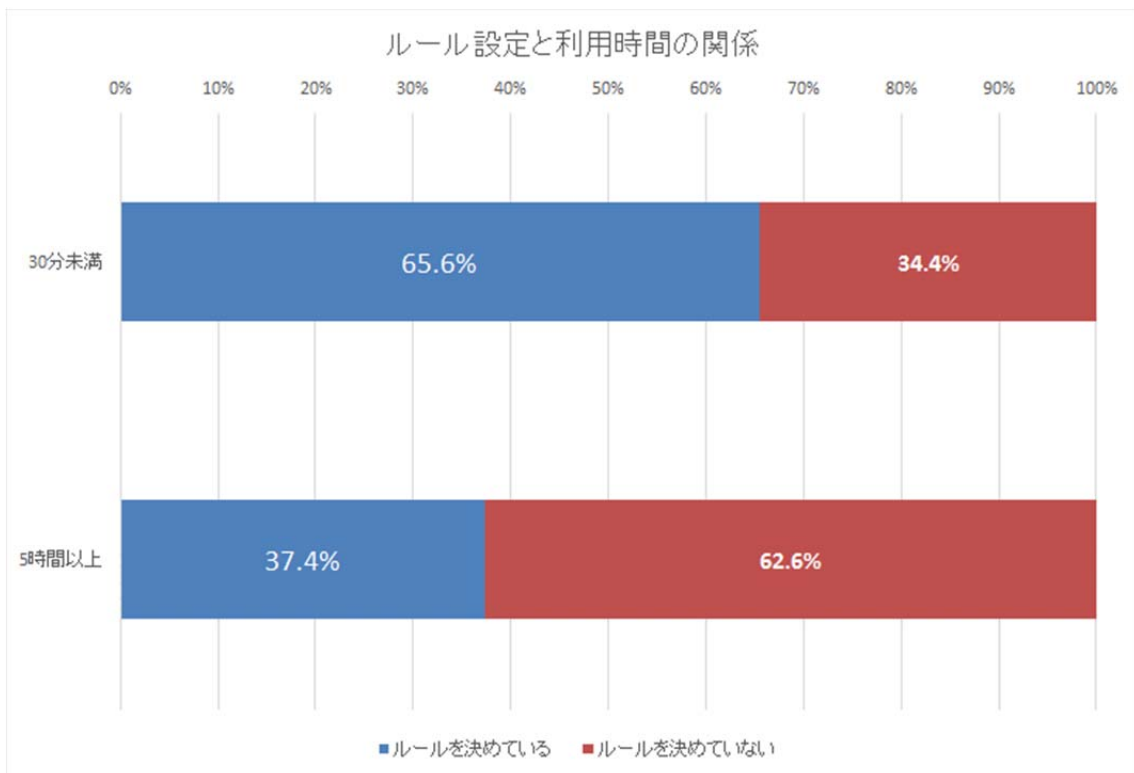


図 4-4-3 利用ルール設定と利用時間の関係（利用時間 30 分未満と 5 時間以上を比較）

4-5 生活習慣と利用時間の関係性

朝ごはんの食べ方、また睡眠時間といった生活習慣と端末利用時間の関係について調査を行った結果、朝ごはんを食べない、睡眠時間が短いグループに端末の長時間利用の傾向が現れた。

また、端末の利用場所と時間の関係性を調べたところ、自分の部屋で利用するグループに長時間利用傾向が確認された。

※「朝ごはんを誰と食べているか」(n=12,569) 「一日の平均睡眠時間」の間に対して (n=12,589)

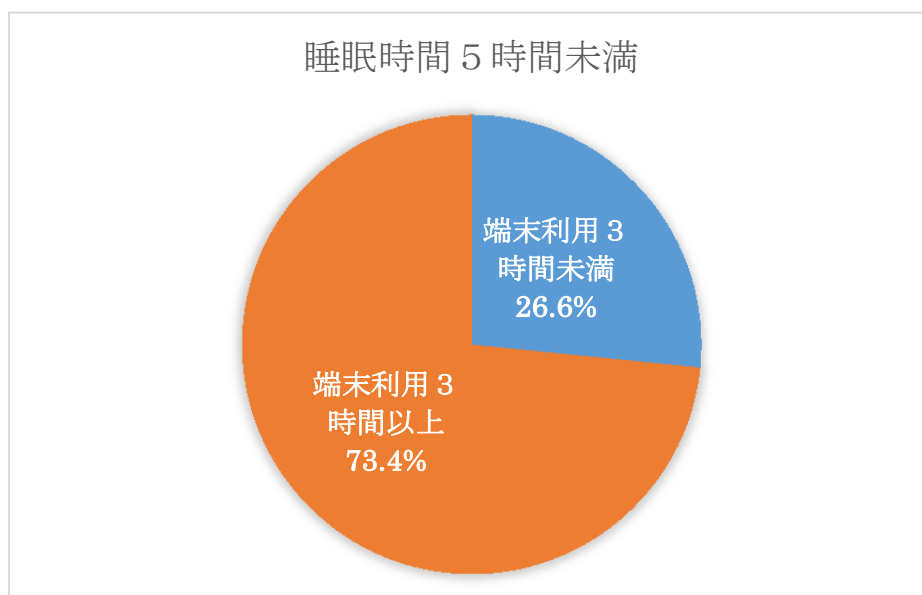


図 4-5-1 端末利用時間と睡眠時間の関係性 (睡眠時間 5 時間未満)

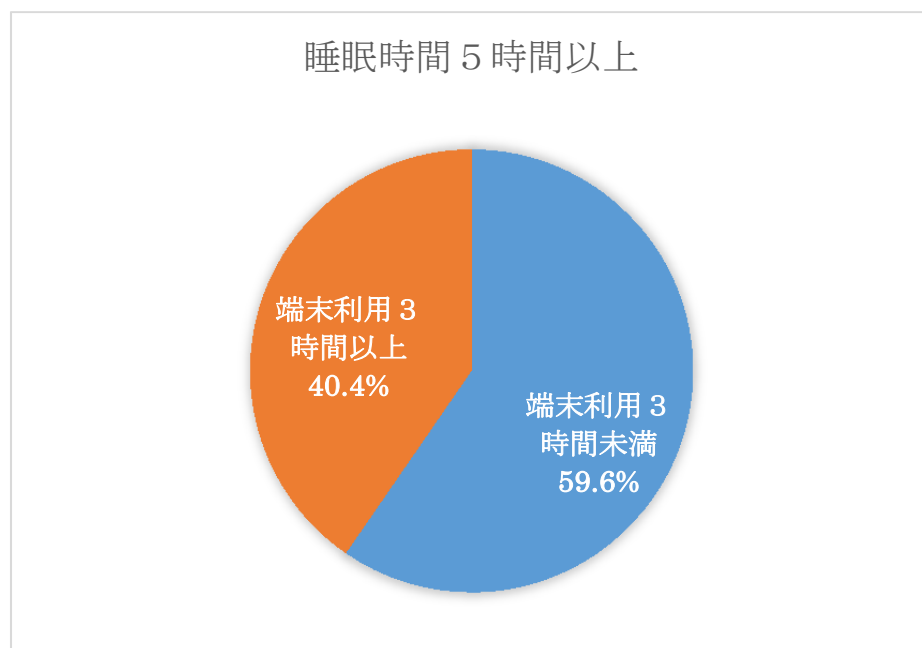


図 4-5-2 端末利用時間と睡眠時間の関係性 (睡眠時間 5 時間以上)

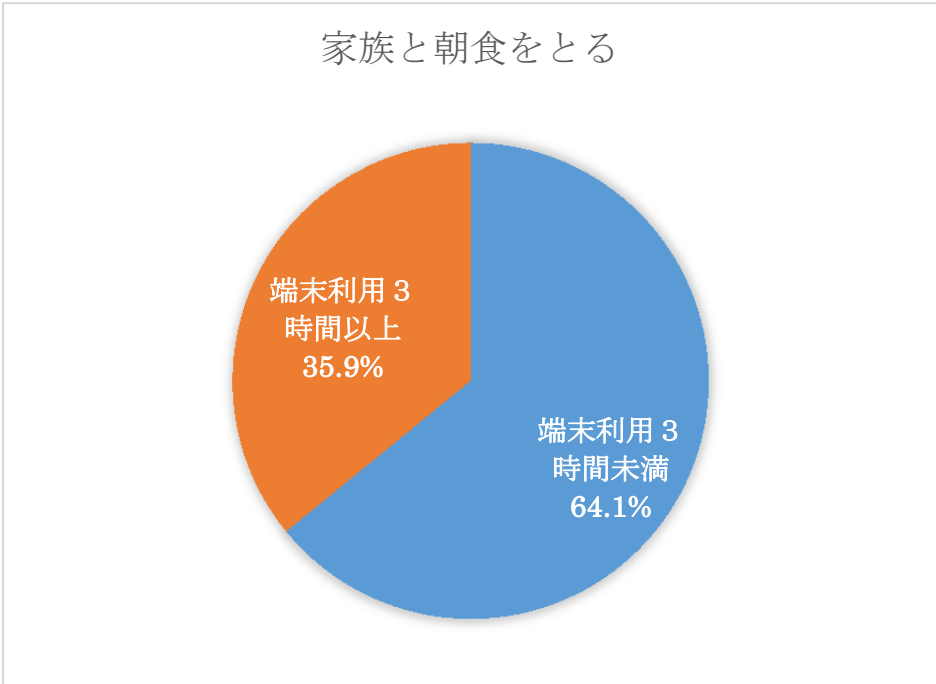


図 4-5-3 端末利用時間と朝食の関係性（朝食を食べる）

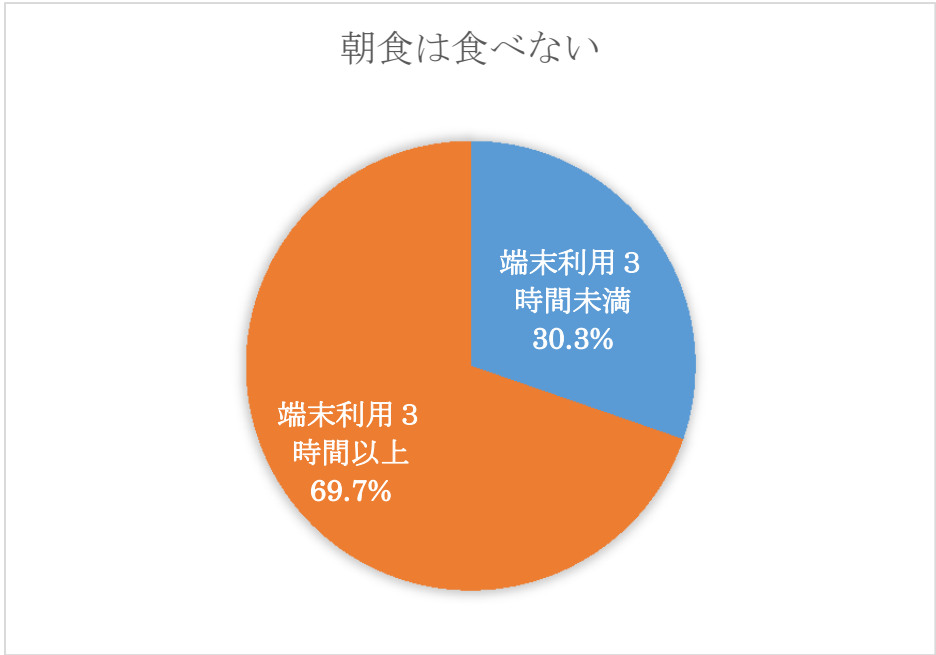


図 4-5-4 端末利用時間と朝食の関係性（朝食は食べない）

※「情報通信機器を最も多く利用する場所」の間に対して (n=11,996)

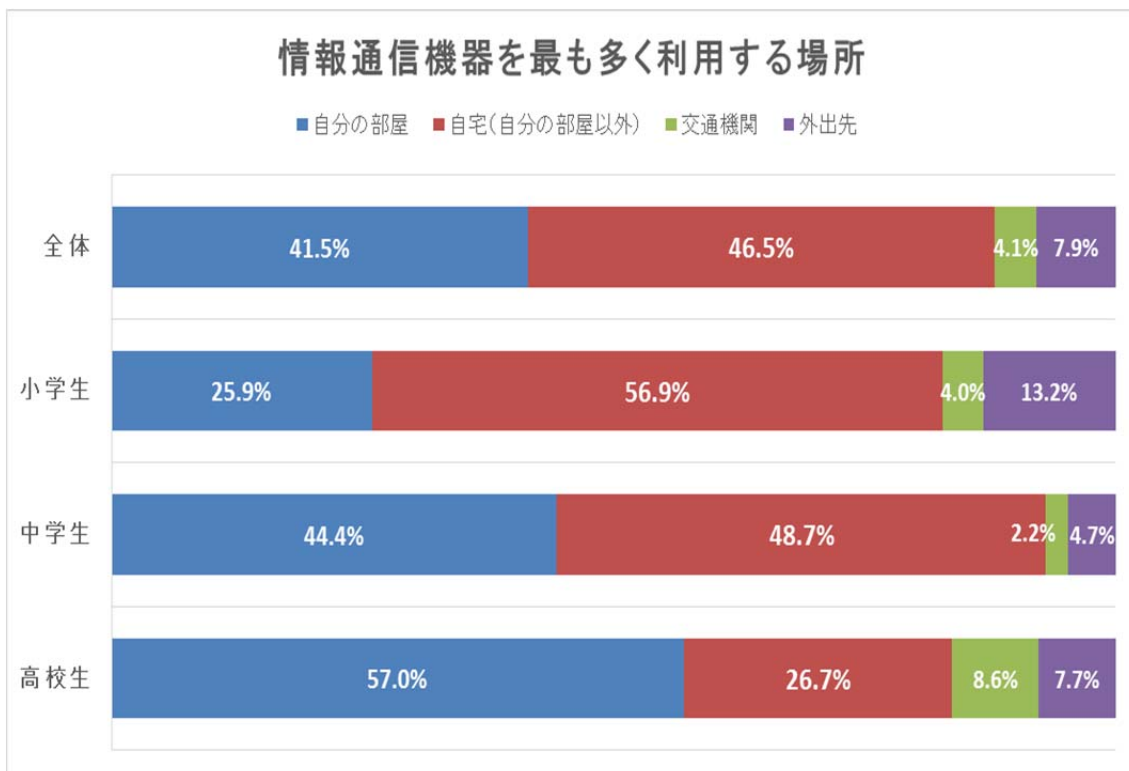


図 4-5-5 端末を最も多く利用する場所

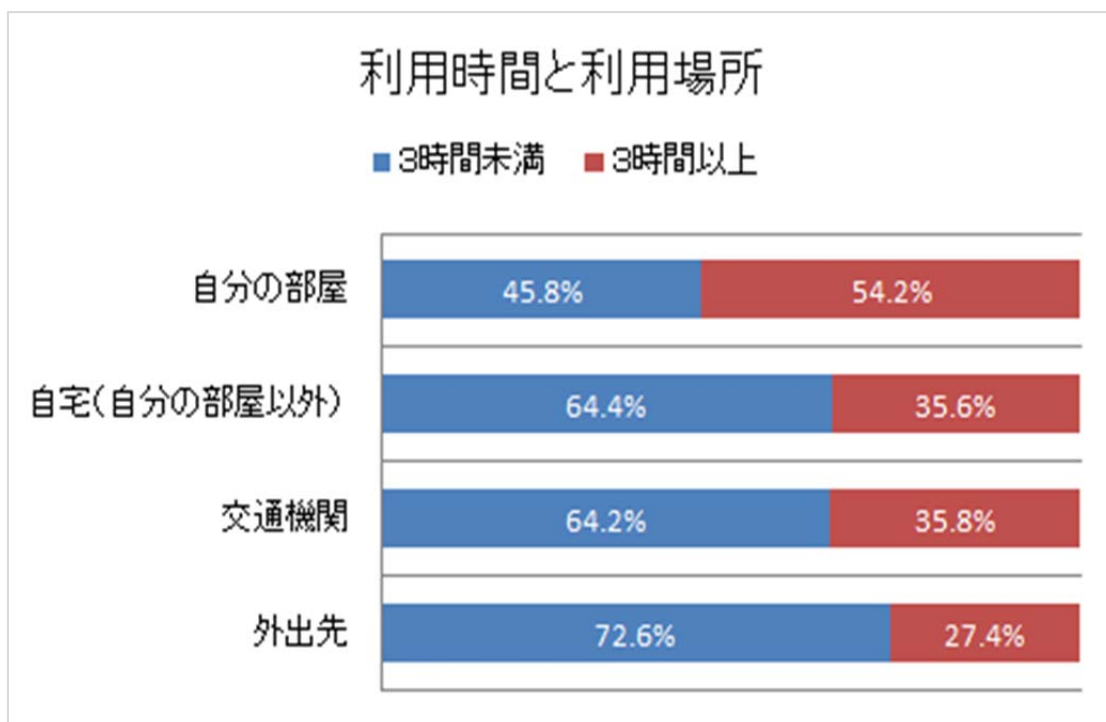


図 4-5-6 端末利用時間と端末利用場所の関係性

4-6 悩んだ時の相談相手

全体の5.9%の子どもが困ったときに相談する相手がいない、または相談する勇気がないと答え、2.0%がインターネット上で相談すると回答していた。

割合として、対面で相談できない比率は1割弱であるが、内容により大きな問題に発展してしまう可能性のある潜在的な割合と考えると、無視できない数である。

※「困ったり悩んだことが起きた時に誰に相談しますか」の問に対して(複数回答)(n=12,229)

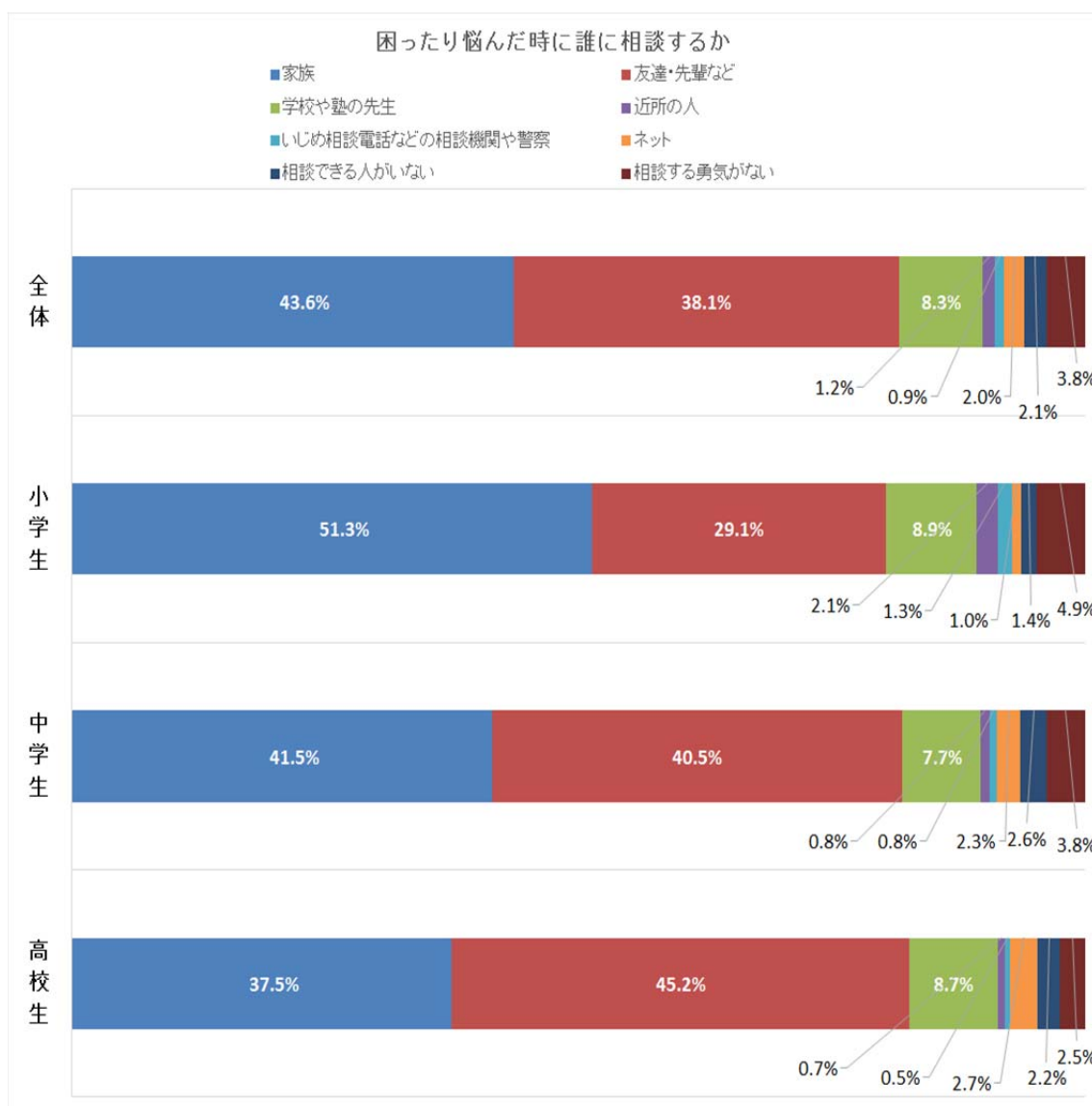


図 4-6-1 悩んだ時に誰に相談するか

4-7 インターネットの危険性の認識とフィルタリング利用率の関係

通信機器を利用して怖いと思うことに、個人情報流出、架空請求などの詐欺行為、ネット上でのコミュニケーショントラブル等が上位に挙げられた。

反対に、インターネットを使っていて怖いと思うことがないと回答したものは全体の6.3%で、93.7%の子どもがなんらかのネットの危険性を知っている結果となった。

また、危険性に対するフィルタリングの有効性も68.0%が理解していたが、利用率は58.8%となり、フィルタリングの有効性については浸透している結果となったが、実際の利用率は低い結果となった。

また自分の利用するWebサイトやアプリが規制された場合、保護者の同意のもと閲覧可能に変更したり、アプリを起動するように変更したりできる、いわゆる「カスタマイズ機能」を利用してフィルタリングを利用している子どもは9.0%で、ほとんど利用されていない状況であった。

※「情報通信機器を使っていて怖いと思うこと」(複数回答)(n=12,129)

※「フィルタリングで怖いことを防げることを知っているか」(n=12,231)

※「情報通信機器にはフィルタリングを設定しているか」(n=11,234)

の間に対して

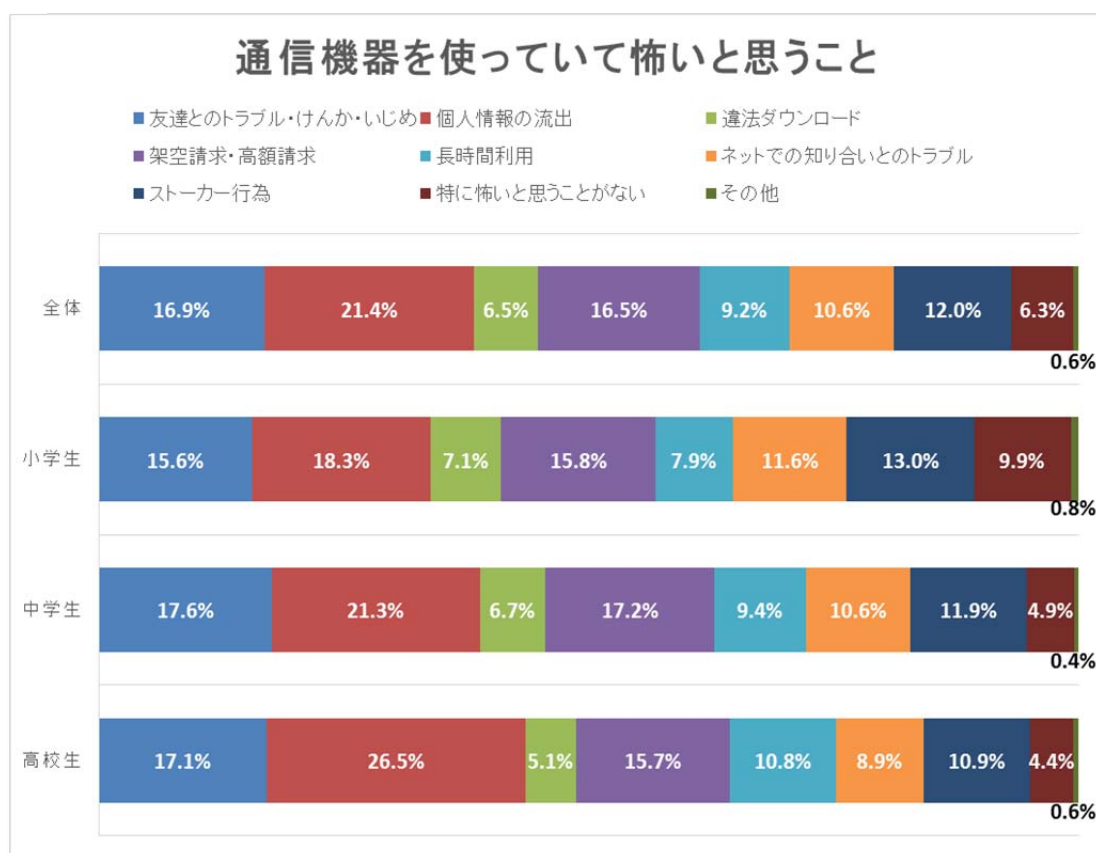


図 4-7-1 通信機器を使っていて怖いと思うこと

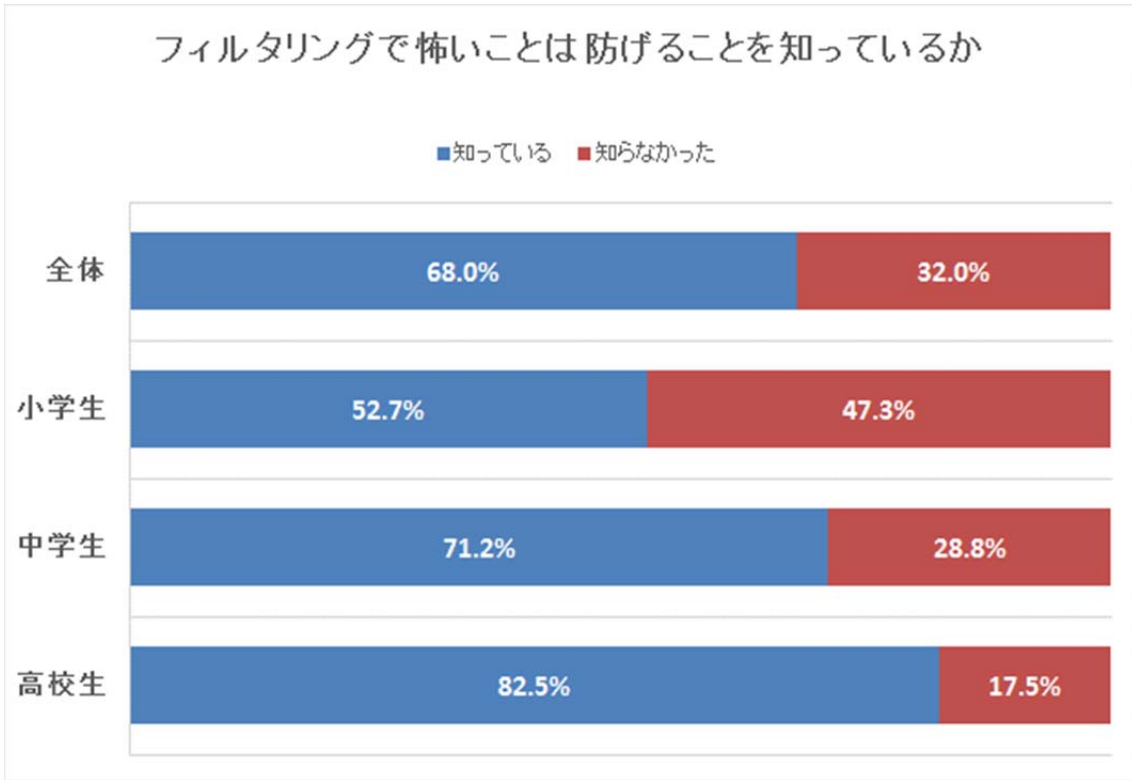


図 4-7-2 フィルタリング有効性の認知度

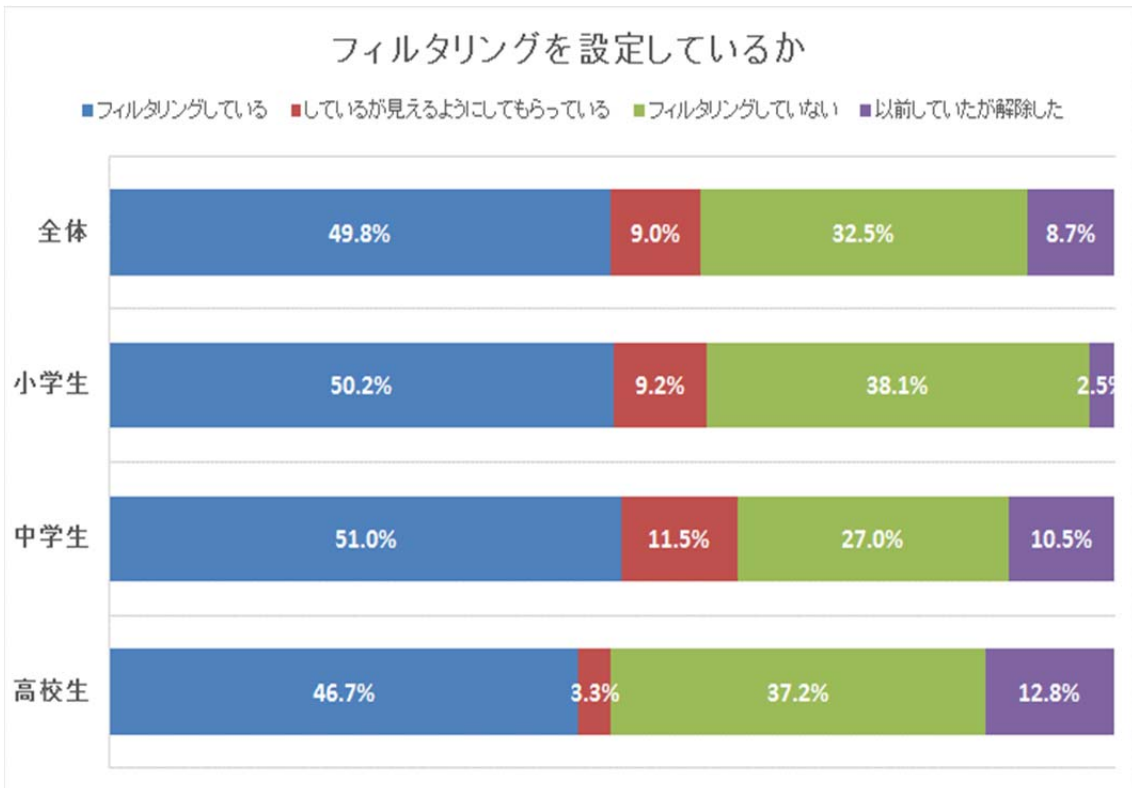


図 4-7-3 フィルタリング利用率

5. 調査結果の補足

■どのようなルールづくりが必要なのか

2012年に世界的なニュースになった、スマートフォン18の約束の例(原文:mom's 18 rules for iPhone)など、多くのルールづくりの参考になる資料は存在するが、いざ現場に持ち込むと、その適応の難しさを感じることもある。

これは、近年であればルールのタイトルはスマートフォンやインターネットとなるが、過去からの例で言えば、テレビ、ビデオ、テレビゲームなどの娯乐的なもの、また夜遅くまで友達と話すことを始めとして、ポケベル、PHS、携帯電話とコミュニケーション的な要素で、長時間利用問題を解決するべく保護者と子どものルールが存在した。

すなわち、どの時代も子どもがルールをきちんと守ってくれるかといった要素が課題であり、スマートフォンの現代においても、親子のコミュニケーションが重要なポイントとなってくる。したがって、子どもとのコミュニケーションにおいて、何らかの困難が発生している場合は、青少年の健全育成の一環として子どもとの関係性構築をサポートしていく対策も必要である。

具体的なルールづくりにおいては、まず子どもがインターネットデビュー前に、ルールづくりのサポート(子どもとのコミュニケーションの取り方)、そしてセミナー等を実施し、今回の調査でも明らかになった長時間利用の可能性があるサービスへの接し方を理解した上で、各家庭にあったルールづくりを行うことが効果的である。

■フィルタリングとネットの長時間利用の抑止効果について

フィルタリングサービスは本来 Web 閲覧制限サービスであり、青少年に好ましくないと思われる Web ページの閲覧制限を目的としたサービスであった。ただし、家庭向けのサービス(携帯電話・スマートフォンを含む)には、利用時間制限の機能を持つものが多く、保護者の判断で一定時間の利用制限、または利用時間帯の設定が可能であり、長時間利用抑止に技術的な支援が可能である。

しかし、フィルタリングの設定(カスタマイズ)は保護者が行う行為であり、保護者にもインターネット利用に対する一定の理解や知識が必要である。

今回の調査結果でも、子どもたちはインターネットの危険性やその有効性について、理解しているものの、利用していない、または解約を行っている傾向が見られた。

フィルタリングのカスタマイズもルールづくりの一環であり、カスタマイズを活用することは、間接的に長時間利用の抑止効果が期待できる。

6. 効果的な取組についてのまとめ

児童生徒のほぼ全員が何らかの機器でインターネットを利用している状況の中、従来の電話やテレビ新聞等の役割と置き換わるような使い方（学習・天気・ニュース・学校・塾の連絡事項等）や、コミュニケーションのうち事務的な連絡と、いわゆる雑談的なおしゃべりの違いなどは、単に長時間利用が依存傾向であるとせず、利用時間と利用手段との関連性などから研究する必要がある。

長時間利用するグループに、睡眠時間が少なく、朝ごはんを食べないあるいは一人で食べる傾向が現れている。ただし、あくまでも調査結果の一つであり、生活習慣との因果関係は別途専門的な視点で調べる必要があるが、これらの結果から見えてくることは、いずれも子どもとのコミュニケーションの重要性であり、長時間利用予防の第一歩となるものである。

インターネット利用に関するルールづくりに関しては、普段からの親子の良好な関係性構築が重要なファクターになってくる。特にフィルタリングの設定や解約は保護者の判断によるものであるため、保護者の正しい知識の習得や子どもとのコミュニケーションが重要になってくる。

これは、児童生徒が悩みを持った時の相談相手についても同様であり、今回の調査では、9割の児童生徒は相談相手がいると答えたが、1割は直接相談できる相手がいない状態にあり、うちネット上の知らない人に相談する割合も確認された。警察庁の「コミュニティサイトに起因する児童被害の事犯に係る調査結果」では、被疑者と会った理由の約2割が「相談に乗ってくれる良い人だから」とあり、ネットを居場所とってしまう子どもの中に、潜在的に事件に巻き込まれてしまうリスクが潜んでいることも考えられる。

また、フィルタリングの利用率向上の面では、子どもが家族で利用する Web サイトやアプリが規制された場合、保護者の同意のもと閲覧可能に変更したり、アプリを起動するように変更したりできるカスタマイズ機能の利用が不可欠であり、利用できないという理由で、短絡的な解約を避ける工夫が必要である。これは、多様な端末でインターネットが利用されていることが、今回の調査でもわかっており、機器別に操作も異なっていることから、啓発活動などで技術的なことに不安を持つ保護者への支援が必要である。

以上より、今後のネット依存の予防に向けた効果的な取組として、次の5点があげられる。

- ① 長時間利用と依存傾向との分析
- ② 親子の良好なコミュニケーションづくりと生活習慣改善の啓発
- ③ 利用のルールづくりとその啓発
- ④ インターネットだけを居場所としない、子どもが相談しやすい環境づくりの考察
- ⑤ 保護者と子どもへの継続的な IT (ICT) リテラシーの啓発